

下街道高山宿界隈の歴史をたどる

土岐市土岐津町高山は市のほぼ中央に位置しており、江戸時代から明治時代にかけて下街道有数の宿場として栄えた地域である。集落を一望できる小高い山の頂上には、かつて高山城が築かれていた。近年、住民たちによる歴史を掘り起こす活動が始まり、史跡の保護や情報発信、イベント開催などを通して地域の活性化を目指している。その成果もあつてか、下街道を訪ね歩く人も増えてきているようだ。今号ではそんな関心が高まりつつある高山の歴史について紹介しよう。



上) 鈴木家には中山道大湫宿本陣の一部が移築され、皇女和宮の宿泊した座敷が保存されている。普段は一般に公開されていない 右) 下街道沿いには、高山城高山宿史跡保存会が設置した灯籠が並ぶ



戦国時代には幾度も戦いの舞台となった城

高山伊賀守秀頼が築いたとされる高山城。築城年代は定かでないが、承久の乱（一二二二年）の頃といわれている。秀頼は土岐氏の一族で、その頃に建てられた土岐氏の館、浅野館を見守ることができるよう、高台に砦を築いたのが高山城の始まりと推測される。土岐氏というのは、清和天

皇を祖とする清和源氏の流れをくむ一族で、中世に美濃国土岐郡に土着した美濃源氏の嫡流である。諸説あるものの、土岐氏の祖とされるのは文治五（一一八九）年、一日市場（瑞浪市）に館を構えた光衡が有力とされる。土蜘蛛退治などの説話で知られる源頼光の後裔であり、明智光秀や浅野長政なども土岐氏一族に連なっている。

ときは移り、弘治二（一五

五〇）年。秀頼の末裔、高山伊賀守光俊が没すると、武田信玄の命を受けた平井光行・頼母親子が兵を進め、城主となる。この時代、のちに岩村城を本拠とする遠山氏をはじめ東美濃の地は、信玄と織田信長のどちらとも同盟関係にあるような複雑な立場にあつた。信長は妹や姪を遠山各氏に嫁がせるなど、遠山氏と婚姻関係を結ぶことを進めていた。そんななか起こった上村

合戦にて光行が武田側に殺されたことで、頼母は織田方に属す。『信長公記』によれば、信長は遠山氏の支城（遠山十八支城）の防備を固めて、武田方の侵攻に備えたという。高山城もその十八支城の一つに数えられ、頼母は信長の支援を受けて城を強固なものとし、七〇〇人の兵を置いた。天正二（一五七四）年、信玄の嫡男、武田勝頼が一万二千の兵

を率いて東美濃へ攻め入り、高山城においても激しい戦いが繰り広げられた。信玄・勝頼二代にわたる軍書『甲陽軍艦』には、勝頼は遠山十八支城をことごとく落としたりとあり、事実であれば高山城も落城したことになるが、地元にも史料などが残っており、正確なことはわからない。翌年、天正三（一五七五）年には長篠の戦いが信長と勝頼の間で勃発する。信長が三千丁の鉄炮による三段撃ちで武田騎馬隊を殲滅したとされる戦い。東美濃攻めも、長篠の戦いも、信玄には天下統一のために上洛する街道の確保という大きな意味を持っていた。甲斐の地から都へ西上するには東山道（東美濃攻め）か、東海道（長篠の戦い）を進まなくてはならなかったのだ。

下街道の中間点にあり大いに栄えた高山宿

下街道は、中山道の脇往還（脇街道）の一つである。中山道の大井宿、大湫宿間にある恵那根ヶ根追分と、名古屋城下の伝馬札の辻を結ぶ、全長十五里（約五八・五キロ）の街道で、善光寺道とも呼ばれた。

脇往還とは幕府直轄の五街道（東海道・中山道・甲州街道・奥州街道・日光街道）に繋がる主要な街道のことをいい、正式な宿場は設けられなかった。しかし、荷物の運搬に便利であるなど、さまざまな理由で多くの人々が利用したことで、次第に休憩施設である立場ができて、それが発展して宿場の機能を持つようになった。下街道も同様で、中山道に比べて峠が少ないという利便性の良さから、善光寺参りや伊勢参りの旅人が多く往来し、牛馬による荷の輸送が盛んだったため、宿場が生まれた。釜戸（瑞浪市）、土岐（瑞浪市）、高山（土岐市）、池田（多治見市）、内津（春日井市）、坂下（春日井市）、大曾根（名

古屋市）などがそれに当たる。高山宿は下街道のほぼ中間地点にある。朝に名古屋を出立すると、高山には夕刻頃に着くことになり、宿をとる旅人が大勢いたので、宿場町として発展していった。また、馬や駕籠を交代する継場としても栄えた。

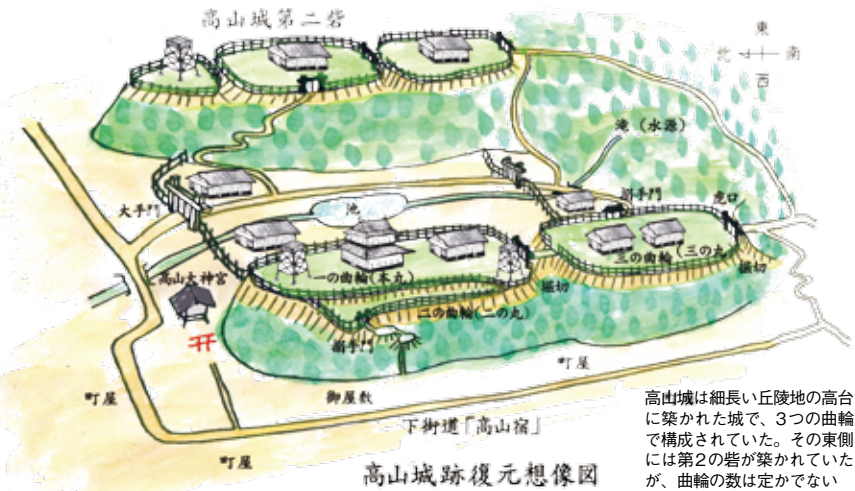
そんな高山宿の繁栄には庄屋、深宣惣助の手腕も大きかった。中山道の各宿場は下街道の通行量の増加を懸念して、再三にわたり尾張藩へ下街道通行停止の訴えを起こしていた。それに対して、惣助は高山村が天領であったことから江戸幕府笠松代官所に訴えて宿場の利権を守ったのだ。

高山村絵図（明治五年）を見ると、現在の県道六九号「高山」交差点付近から高山区民会館までが、いわゆる宿場町であった。十数軒の宿屋が営まれており、使用人などを含め五〇〇人ほどの集落を形成していたようだ。明治十二年



上) 現在の下街道高山宿において、当時の面影を残すものは残念ながら下街道の道筋くらいしかないが、明治以降の建築ながら岩崎屋や鈴木家などにかつての宿場町の佇まいを見ることが出来る 下) 下街道を少し脇にはいったところにある五智輪さま。高山城に関わる武将の墓といわれている

には土岐郡役所が置かれて、高山村は行政の中枢をも担うことになった。平成二十四年四月、高山地区で「右なごやみち」と刻まれた道標が見つかった。民家の境界石として横にした状態で埋められていて、掘り出したところ下部が折れていた。右側面には「明治二十六年三月 施主田中き」とあり、明治に入っても下街道では多くの人が行き交っていたことがわかる。その後、下街道のルートを基に、国道十九号や中央道が開通した。



高山城は細長い丘陵地の高台に築かれた城で、3つの曲輪で構成されていた。その東側には第2の砦が築かれていたが、曲輪の数は定かでない



右) 武田勝頼の東美濃攻めの折、高山城でも激しい合戦があった。江戸時代になって、その犠牲者を供養するために、古城山慈光院（現在の穴弘法）が開かれた。現在は廃寺となっているが、今も104体の石仏が安置されている 左) 地域の歴史の周知とまちづくりの一環で開かれた「高山城戦国合戦まつり」。写真は高山城戦国武将隊

その後、高山城は岩村城主、田丸直昌の支城となる。慶長五（一六〇〇）年の関ヶ原の合戦は関ヶ原の地だけでなく、各地で西軍、東軍の間で戦いが繰り広げられた。土岐においても、直昌（西軍）と妻木城主、妻木家頼（東軍）が激しく戦った。家頼軍の高山城総攻撃で、城を持ちこたえるができなくなった直昌は城中に火を放ち、鶴ヶ城（瑞浪市）へと落ち延び、やがて降伏した。元和元（一六一五）年、一

高山城高山宿史跡保存会
後藤清事務局長

保存会では高山城跡の整備をはじめ、勉強会を行ったり、高山城戦国合戦まつりを開いたりするなどして、高山の歴史や文化を地域の活性化に活用できるよう取り組んでいる

<http://www.tokitakayama.com/>